

第26回 分断国家アメリカの「新しい階級闘争」

明治大学政治経済学部
専任講師・博士（経済学）

下斗米 秀之

今年の1月、国際政治学者イアン・ブレマーが社長をつとめる調査会社のユーラシア・グループは、24年の「世界の10大リスク」のトップに、アメリカの政治的分断「米国の敵は米国」を選んだ。アメリカは分極化と党派対立、政治システムの機能不全を克服することができるか。残念ながらその見通しは明るいとはいえない。初の女性大統領を狙うニッキー・ヘイリーも予備選ではトランプに連敗し、「もしトラ」の可能性が現実を帯び始めている。民主党もバイデン続投の声が大きく、大統領選は4年前と同様の面子で、高齢の2人の戦いになりそうだ。

とはいえ、この分断は二大政党の衝突という単純な構図ではない。政治学者マイケル・リンドにいわせれば、これは国内の上級階級と労働者階級のあいだの「新しい階級闘争」である¹。新自由主義のもとで進められたグローバル化の「勝者」となった少数の管理者（経営者）エリートと、「敗者」となった大多数の労働者階級の対立だ。もっとも数の論理でいえば、労働者階級が団結すれば、上流階級に対して選挙で優位に立てるようにもみえる。しかしアメリカの労働者階級は、宗教、地域、人種、民族、イデオロギーなど、あらゆる面で鋭く分裂している。国内の労働者と移民との間で、仕事や公共サービス、地位をめぐる奪い合いが激しさを増し、数で劣るエリートに有利に働いている。

リンドは、人種や宗教の異なる大多数の労働者階級がかつて持っていた「拮抗力」を取り戻す必要性を訴える。アメリカでは、1980年代から約30年間、大統領、副大統領、国務長官のほとんどをブッシュ家とクリントン家の人物が務めてきた。この間、労働者階級の所得は低迷し、オフショアリングによって欧米の製造業は壊滅的な打撃を受けた。世界金融危機による経済崩壊や複数の悲惨な戦争も経験した。ドナルド・トランプは、共和党の予備選でブッシュ家のジェブ・ブッシュを、本選では民主党のヒラリー・クリントンを破って大統領になった。多くの有権者は、四半世紀にわたって繰り返されてきた、テクノクラート新自由主義の政策サイクルを断ち切りたいと考えたのである。トランプ支持者たちのポピュリズムはエリート支配に対する当然の反動であったとリンドは主張する。しかし、トランプ的なポピュリズムにも限界はある。ポピュリストのデマゴグは、不満の代弁者にはなれても、上流階級が支配する新自由主義に代わる安定的な制度的オルタナティブを作りだすことはできない。ポピュリストが得意なのは選挙活動であって統治ではない、というリンドの言葉は重い。

真の階級平和を実現するには、経済・政治・文化といった社会権力の三つの領域すべてにおいて、大学教育を受けていない大多数の人々に意思決定権を取り戻させる必要がある。現代のアメリカに1970年以前の民主的多元主義を復活させることができるか。分断国家アメリカにおいて、それが途方もない難題であることはいままでもないが、独占的なエリートから民主主義を取り戻す必要性には強く同意する。

¹ マイケル・リンド著（中野剛志解説、施光恒監訳、寺下滝郎訳）『新しい階級闘争—大都市エリートから民主主義を守る』東洋経済新報社、2022年を参照のこと。